

國學院大學學術情報リポジトリ

紹介 徳橋達典著『吉川神道思想の研究：
吉川惟足の神代卷解釈をめぐって』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 遠藤, 潤, Endo, Jun メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000062

〔紹介〕

徳橋達典著 『吉川神道思想の研究』

吉川惟足の神代卷解釈をめぐって』

遠藤 潤

本書は、近世前期の日本において活躍した神道家吉川惟足（一六一六—一六九四）の思想について論じたものである。吉川惟足は、中世から近世にかけて神社・神職に対して重きをな

した公家である吉田家の家伝をその存続の危況下で継承するとともに、徳川幕府をはじめとする武家からその神道の知

見を認められ、幕府で神道方という地位を認められた人物である。著者の徳橋氏は本学大学院文学研究科博士課程を修了し、博士（神道学）の学位を授与されており、本書は國學院大學課

序章 吉川惟足の『日本書紀』尊重論
第二章 吉川惟足の混沌と未生已生論―神代卷冒頭の解釈について―
第三章 吉川惟足の道統継承問題の再考察

第四章 吉川惟足の葬祭論の一考察―保科正之の神葬祭をめぐって―

第五章 吉川惟足における神籬磐境の伝の要諦

第六章 吉川惟足の八雲神詠理解と詠歌に関する一考察

第七章 吉川惟足の神語の理解と詠歌

第八章 吉川惟足と山崎闇齋の神代巻解釈の相違についての

一考察

第九章 吉川惟足に見る中世と近世神道思想の端境期

終章

それでは本書の内容について、各章に沿って紹介したい。

徳橋氏は序章において、この著述の目的として「惟足が神代巻に向き合う姿勢」と「吉田家伝の不断の継承に向けられた情念」を抽出すること、そして「人が信仰の拠として求める神典の役割」と「神々と人々のつながりを得る方法としての言葉（詠歌）」を究明することを掲げている。

第一章では、惟足が神道理解の拠り所として『日本書紀』神代巻を多用していたことを確認した上で、惟足自身による神代巻講義の聞書を資料として、惟足が『日本書紀』を尊重する理由や編成様式の特徴などを明らかにする。惟足は、書紀を『旧

事記』『古事記』とあわせて用いながらも、吉田家の伝統に従って書紀を最も重視する。書紀の本段（正文）と一書の関係については、惟足は、本段が根本的な事柄や大要を一説にまとめているのに対して、一書は本段を補い、深微な道理を記して、古典を深解させる編成様式であるとする。徳橋はこのような態度を「編者の作爲的内容統制による記述の一元の合理化を嫌い、文献伝承の記述、神話の多様性を尊重する姿勢」と把握している。その上で、本居宣長による「書紀の論ひ」と対照しながら、惟足には「神典の記述内容を神語として信仰する前提がある」とする。

第二章では、惟足による神代巻冒頭の理解を示す未生已生論について論じる。徳橋氏によれば、惟足は、気による陰陽の動静という作用を混沌の具体化と見て、国常立尊の発現に結びつけており、混沌を宋学における太極と同定し、国常立尊の発現以前のものとしている。混沌と国常立尊が発現したのちの現実世界との関係について、惟足が説くのが未生已生の説であるという。混沌を未生とする惟足のとらえ方は中世神道における機前の説に通じている。この点について、徳橋氏は神道の極所を天地開闢ではなく、それ以前の混沌を重視する点で中世神道説の域から脱却していないとし、他方、「宋学の垂流」とする評

価についてもこれを完全には否定できないとした上で、重要なのは惟足の主眼が、記述された世界のありようの分析ではなく、「神典に描写された世界から天下や人のあるべき姿を工夫すること」にあったと結論づける。

第三章では、惟足が萩原兼従から伝授された奥秘を吉田家に返伝授しえなかったという道統継承問題について改めて考察する。徳橋は、その理由の一端として重要なのは、惟足と吉田家のあいだにある、神典『日本書紀』神代巻に対する価値基準の相違であるとする。萩原兼従は道統護持のためには血脈や家筋に拘らず、器量の備わったものに伝授すべきだと考え、伝授を受けた惟足もこうした価値観を共有した。具体的には惟足は神代巻講談から順序を踏み、そのような手続きの中で吉田家側が一定の価値を共有した上での秘伝の返伝授を目指したが、吉田家はこうした価値基準を共有しなかった。ここではこのように論じている。

第四章では、保科正之の神葬祭執行に関して、惟足と幕府の交渉を追うとともに、惟足の神葬祭論およびそれに関する諸研究を検討して、惟足の神葬祭に対する態度を分析する。徳橋氏は、当時の状況を、寺請制度が定着して仏教が天下の大法となり、神職には神道頽廃という逼迫した不安感があったと捉え

る。吉田家がこの不安を解消しなかったのに対し、惟足は、保科正之が神道再興の業績をなしたと評価し、正之の葬儀を神葬祭で執行することが神道再興の気運を喚起すると考えて、その神葬祭実現に尽力したとする。さらに、神葬祭に関する惟足の論について、安蘇谷正彦や上田賢治の説を参看しながら、その特徴について、宋儒の力説は惟足の説の与件にすぎないこと、惟足は天命における生死の必然性を強調しており、天寿による死に幸不幸を認めないこと、死を気の消散として説きながらもそれに頓着せず、生前の交流同様の心意で死者祭祀をとらえていること、などを指摘する。

第五章では、吉田神道の最高奥秘である神籬磐境の伝について、佐藤正勝文書に収められる「神籬磐境伝口訣」を対象として、惟足の理解を考察する。これまでの主な研究が、忠君に主眼をおいて神籬磐境の伝を解釈しているのに対して、「神籬磐境伝口訣」に不徳の君主の廢位について解説されている点に注目し、封建的忠君思想に依存しない解釈の可能性を模索する。安蘇谷、和辻哲郎、上田の論を踏まえて、惟足の考える神籬磐境の伝の要諦は高皇産靈尊の神勅にもとづく皇孫奉斎にあり、それは天下太平の祈りであると考ええる。他方、君臣の道についても、この本義からすれば、君主が天下太平に反する場合、そ

の不徳の君主の廃位も容認されるが、皇位の後継を有徳の皇胤に尋ねる方法で皇統の連綿を担保していることを指摘する。

第六章では、惟足にとつての八雲神詠や詠歌の意味について論じる。歌学から神道へと歩んだ惟足は、卜部兼延から藤原定家に相伝された唯受一人の古今伝授は兼従にも伝わっており、八雲神詠の秘伝はこの相承だと主張した。吉川神道における三事伝は和歌に関する秘伝であり、和歌の理解を高く位置づけている。惟足の神道説における和歌の意味は、徳橋氏によれば、神々に感応する人々の心と、人々の心を納受する神々との交流を媒介することである。八雲神詠について、吉川神道では、安居においても艱難を忘れまいとする敬を肝要とし、さらに秘伝には男女関係を陰陽の概念を援用して解釈しつつ、それでも艱難を忘れない敬が教訓とされている。

第七章では、記紀に見られる「神語」という語についての惟足の理解を検討する。徳橋氏によれば、神語は神々が直に語った言葉の意味するが、惟足は『日本書紀』神代卷の記述すべてを神語としており、伊弉諾尊と伊弉諾尊の国生みの言葉や神代卷に記された素戔嗚尊の詠歌も神語として認識される。また、禊の伝承を神道で重視される中徳を説く神語と捉える。宝鏡奉祭の神勅は、吉田神道において神語として理解されていたが、

惟足はさらに忠孝や敬という概念に則して解釈する。惟足の神語に対する姿勢は、神語の神慮に任せ、神慮のままにしたがうというものであった。

第八章では、吉川惟足と山崎闇斎の神代卷解釈の相違を検討する。垂加神道家の谷泰山は惟足の返伝授不履行を批判したが、それは万世一系を皇統の正統性の根拠とする垂加神道の立場から、惟足の非血縁相承を不敬と認識したものと推測される。また、伊勢神道と吉田神道の融合をめぐる、それを提唱とする闇斎と拒絶する惟足の対立は深まった。垂加神道の重要な秘伝である土金の伝は、すでに惟足が重視していたが、垂加神道家は惟足の理論を特に尊重はしない。ここでは、玉木正英編の『玉籤集』を参考に惟足と闇斎の思想的関係を検討し、土金の伝の解釈については両者の相違点は明確でないものの、惟足による「天人合一」と闇斎による「天人唯一」を比較して、神代卷冒頭の記述に対する両者の違いを検討する。惟足の天人合一は神代卷に記された渾沌（混沌）に立ち帰り、国常立尊とのつながりを感じ、それを現在の自己に結びつけるものであった。闇斎は儒学の形而上学的体系を根幹として天と人の直接的同一性を説き、天人唯一という絶対的概念を確立した。神代卷解釈において、闇斎には儒教に依拠するという呪縛が残

り、他方、惟足の天人合一は神代卷解釈を大きく逸脱したわけではないという。

第九章では、惟足を「中世神道思想を抱えながら、近世神道思想が萌芽する時代を背景として、「道」を模索する」者として捉え、惟足の神道説にみえる、中世神道思想としての特徴、混沌と国常立尊の理解、近世神道思想としての特徴をそれぞれ検討する。中世の特徴として徳橋氏が特に注目するのは、『日本書紀』『古事記』『旧事記』の三書を用いながら『日本書紀』尊重の姿勢を厳守すること、また一書などの多様性を尊重しつつも小異を一理に包摂するあり方である。さらに、混沌の理解に検討を進め、これが伊勢神道書における「機前」と通じていることを確認した上で、惟足の具体的な混沌論をあとづける。また、混沌から「葦牙」の働きによって、国常立尊が発現するとして、惟足が「葦牙」の生成力を媒介にして混沌と国常立尊を結びつけていることを確認し、惟足の神道説が中世神道の重力量を脱していないと評価する。他方、近世神道として成立する理学神道は、惟足が吉田神道を護持するため、徳川幕府の政治理念と自らの神道説の整合に努めるというところで展開したものである。徳橋氏は、惟足自身は中世神道である吉田神道の守護者であって、彼が近世神道論の嚆矢であるというのは意図

せざる結果だったと結論している。

終章ではこれら各章での成果および今後の課題と問題点について述べている。

以上、本書の内容について、各章の論旨を評者なりに追う形で紹介した。中世と近世、公家と武家、儒学と神道、…、吉川惟足は過渡や境界の重奏する様相の中に位置づけられて理解されてきた。本書は充実した先行研究をふまえつつ、テキストの精読をもってその先に歩みを進めたものであり、惟足への深い共感に根ざしつつ客観的な論考を展開している。近世の神道に関心をもつ諸氏におかれては、ぜひ実際の書物を紐解いていただきたい。

(A5判、三〇二頁、ぺりかん社、二〇一三年二月発行、六八〇〇円+税)